

童話

— 猫の夢 —

水谷年恵子

薔薇姫

猫が扇を拾ひました。

「暑くて困つてゐる所だつた。丁度いい。」

早速ひろげて、あふぎました。

「涼しい風が来る。いい心持だ。」

猫はニコ／＼して居ましたが、あふぐ度に、

ヒラ ヒラ ヒラ、

ヒラ ヒラ ヒラ、

と、扇の中から、蝶々が一匹づつ舞出すのに気が

附いて吃驚しました。

「おや／＼、不思議な扇だな。」

あふぐと、又

ヒラ ヒラ ヒラ、

と、蝶々が舞出します。又あふぐと、又、

ヒラ ヒラ ヒラ、

と、蝶々が舞出します。

蝶々は十匹も、二十匹も、三十匹も舞出して、

猫の頭の上を、

ヒラ ヒラ ヒラ、

ヒラ ヒラ ヒラ、

と、舞つて居ります。

猫が驚いて扇を疊むと、三十匹も五十匹もの蝶々は一かたまりになつて、

バラ姫様のお國に歸ろ、

バラは紅バラ、白いバラ、

みんなよい色、よいにほひ、

バラのお國はバラばかり。

歸ろ、歸ろ、バラの國。

バラより綺麗なバラ姫様、

紅バラよりも美しい、

白バラよりも美しい、

どのバラよりも美しい。

歸ろ、歸ろ、バラの國。

と、聲を揃へて歌ひながら、ヒラ ヒラ ヒラと

向ふの方へ飛んで行きます。

「面白い〜。私もバラの國へ行つて見よう。」

猫は扇を口にくはへて、蝶々の飛んで行く方へついて行きました。

蝶々の群は、山を越え、谷を越え、野原を横きつて、ヒラ ヒラ ヒラと飛んで行きます。猫も山を越え、谷を越え、野原を横きつてついて行きました。すると、ブーンとよい薫がして来て、やがて眼の前に、見渡す限り赤い花や、白い花や、色々のバラの咲亂れてゐる花園がありました。蝶々の群は其花園の上へ來ると、一匹づつ離れ〜になつて、あちらの花、こちらの花に止つて、翅を休めました。

「ははあ、此處がバラの國か、成程、バラがどつさり咲いてゐるなあ。」

と、猫は驚いてしまひました。

何處までバラの花が咲いてゐるのか、バラの國の向ふの涯はポーツと霞んで見えません。霞の中にボンヤリと見えるのは、バラ姫様の御殿でありませう。蝶々達は此の美しいバラの花の中から、自分の好きな花を選んで、翅を休めたり、甘いお

いしい蜜を吸つたりしてゐます。猫は蝶々が羨しくなりました。

「わたしもバラの花の上で晝寝がして見たいなあ。」

と言つて、紅バラの大きな花が十花ばかり、かたまつて咲いて居るのを目にかけて、飛附きました。

見事に咲いてゐた紅バラは、亂暴猫に飛附かれて可哀想に、三花も四花も、バラくくツとくづれて散つてしまひました。

猫はバラの木の茂みの中へ挟まつて、もがけばもがく程、バラのトゲにチクリくと體中をさされて、

「あいたつた、あいたつた。」と泣聲を絞り出して騒ぎ立てました。

蝶々達は亂暴猫が紅バラをひどい目にあはせた事を知ると、皆でバラ姫様へ告げに行きました。

バラ姫様は家來に、

「其を猫を見てお出で。」

と、お言附けになりました。

家來はかしこまつて、紅バラの所へ来て見ました。紅バラの木の茂みの中で、猫は體中バラのトゲにさゝれて腫れあがつて居ました。それから紅バラの木の根元には、一本の扇が落ちてゐました。バラ姫様の家來は其の扇を拾つて、

「おや、これは此の間、トンビが盗んで行つたバラ姫様の扇だ。」

と言ふと、猫は苦しい中から、

「それは私のです。私が道端で拾つたのです。」

「さうかお前が拾つたのか、まあ何でもよい。お前はバラ姫様のバラの花を散したわる者だ、さあ来い。」

と言つて、猫を掴み上げて、御殿へ連れて行きました。

バラ姫様の御殿はバラの花でお屋根が晝いてあ

ります。丸い柱も、廣い天井も、皆バラの花で飾つてあります。猫はバラ姫様の前へ引立てられて眼をつぶつて、ふるへて居りました。家來が、

「此の猫が紅バラを幾花も散らしたので御座います。猫のそばに此のお姫様の扇が落ちて居りました。此の猫が、これを道端で拾つたと申して居ります。」

さう言つて、扇をお姫様にお渡し申し上げました。其の時、猫はソーツと眼を細くあけて、バラ姫様のお顔を見上げました。すると、バラ姫様のお顔から、バーアツと後光がさして何も彼も見えなくなつてしまひました。バラ姫様はおやさしいお聲で、

「お前は私の扇を拾つて呉れて有難う。」

とおつしやいました。そして家來に言附けて、バラの花の蜜を猫の體にお塗らせになりました。

すると不思議な事には、バラのトゲにさゝれた體

中の疵がすぐに直つて、もとの通りの猫になりました。

猫は有難い事だと思つて、お姫様に、
「何ともお禮の申し上げやうも御座いません。」
と申し上げて、お姫様のお顔を拜むこともようしないので、バラの御殿をさがりました。バラ姫様の家來が、

「なさけ深いお姫様だ、もう此のお國へ来てはいけないよ。」

と言つて、バラの國の外へポーンと放り出しました。

「ニャン。」とないて、眼をさましたら、其處は自分の飼はれてゐるお家の縁側で、今のはお晝寢をして見た「猫の夢」だつたのです。

x

x

x

x

x

x